
魔族（妖狐）族に転生しました

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔族（妖狐）族に転生しました

【Zコード】

Z0239W

【作者名】

レフエル

【あらすじ】

アンケート手違いで転生することになった姉弟たちの壮大で大変そうな物語です。転生したのは魔族（妖狐）と人のハーフである。女神の加護をもらつて頑張つていきたいとする姉弟を応援してあげてください。

プロローグ（前書き）

リニューアル作品です！！

少し改良して頑張って書いていこうと思います

プロローグ

真っ白な空間にあたし達はいた。
どこまでも真っ白い空間を見てるので夢かと思い、自分の頬を叩く。
うん、痛いので夢じゃなかつた。

「姉ちゃん、これって」

どうやら弟も自分の頬で夢かどうか試したのか頬が赤い。
これは間違いない！テンプレ的な展開に間違いないかと。
にしても、どうしたら戻れるのだろうか。
戻れるなら戻りたいだつて

「クリアしたいゲームがあつたのにな〜」

「姉ちゃん、そればつかだね」

ぽつりと呟くと弟は苦笑いを浮かべて言つた。
だつて、それが趣味だし。

「ま、僕もしたいゲームがあるし。気持ちはわかるよ」

「だよね、責任者でこーい！..」

弟はあたしを見て笑顔で気持ちの賛同をしてくれたのでテンションがあがり、叫ぶことにしてみた。
そしたら、綺麗な女人が現れた。

「ここまで神聖な雰囲気があるとなんかたじたじになりそうだよね。
もしかして、この人が責任者なのかな。

「遅くなつて」めんなさいね。」

「あ、いえ。そんな謝らなくとも」

本当に申し訳なさそうに謝る女性。

こうじつた女性になれたらよかつたのにな。

ぼんやりしてると弟にわき腹つかれて正気に戻る。

「あの、あたし達はビーチにいるのですか？」

「それは……なんというか手違いが起つてしまつたの」

疑問を持ちだして尋ねると女性は困ったように笑つて言つた。
いつたいどんな手違いがあつたのだろうか？

「それを説明する前に自己紹介でもしましょ。うか。
わたしは女神のヴェルダンティーといつ」

「え、あの運命の女神の！？」

ヴェルさんはあたし達に自己紹介をしてくれた、これを聞いた時か
なり驚いた。

だって、北欧神話の運命の女神が目の前にいるんだよ！？
驚かずにはいられないよね。

「あ、北欧神話とは別の女神だから」

「 なんですか」

ヴェルさんはフレンドリーな態度で「 」と笑つたまま答えた。
話しやすいかも。

「 姉ちゃん、自己紹介は？」

「 あ、そつだつたーあたしは芝村要しばむらひかなめです。」

弟にせかされて慌てて自己紹介をする。

男でも女でも通用する名前だから、お気に入りではあるかな。

「 んで、 」
「 」

「 芝村璃音しばむらりおんです」

そして双子の弟を紹介する。

「 」
「 」

「 要りやんに璃音りおんくんね」

「 」

ヴェルさんは「 」と笑つて言へ。

綺麗な笑顔だよね。こんな人を困らせる人なんているのかな。

「 さて、 そく話すわね。手違いといつのはアンケートのカード
をあなた達に贈つてしまつたといつことよ」

「 あのはがきの」とですか？」

ヴェルさんがこちらを見て苦笑いを浮かべて言った。
その言葉にふと思いつ出して尋ねると頷いてくれた。

「そのはがきは貴女達に贈られた」とはないはずだったんだけど

「手違いが起きていた」と

困ったように笑う、ヴェルを見て言つと後ろをヴェルさんが見た。
そこには呪われた謎の男性がいた。
うわー、ぼろぼろだよ。

「セレで伸びるのが犯人よ。手違いとはいって、貴女達もいづれは
この手紙が送られることになつていていたから
それが早められたと思ってくれたらいよ」

「結果は変わらないこと」とですか

あたしが落ち込みながら言つと、ヴェルさんが頭をなでてくれた。
ふわー、優しいな

「君はちゃんとしといたから、君たちには異世界に転生してほしい
の」

「拒否権は？」

笑顔でヴェルさんが言つと璃音が聞いた。

「ないわよ。上の神様と話し合つてした結果がこの状態だもの」

「あの、親が心配すると思つ」

苦笑いをして、ヴェルさんは、あたしは元の世界にいる親のこと

を思つて言つた。

「あの点は大丈夫よ。完全な魂を一つにわけておいたからね」

「といふことはあたし達の存在はなくなつていなんですね？」

笑顔でヴェルさんは安心させるように言つた。

思わずそれを聞いて尋ねると、頷いてくれた。

それなら安心だ。親を悲しませるのは嫌だからね

「転生してくれるかしら？」

「「はー」」

小首を傾げて、ヴェルさんは聞いたので、一人で声をそろえて返事をした。

するとともに嬉しそうに、ヴェルさんが笑つてくれた。

「ありがとうね、後でお礼のプレゼントを贈るから」

そう言つとあたし達の田の前にカードが現れた。

合計で7つだ。もちろん、璃音の方には、ダーツが出てきた。

「これを選べばいいんですか？」

「ええ、ちやんとよいものが当たるとこいんだけど」

あたしが聞くとヴェルさんは悩んだように言つ。

どういうことか聞くとこのカードは邪神のロキが作つたらしい。
だから、良いものが当たるといいのだと言つたのか。

「最初はあたしが行くわ！」

まず、一枚目

魔力：S

次に一枚目

刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ボルグ

三枚目

対魔力：B

四枚目

約束された勝利の剣エクスカリバー

五枚目

全て遠き理想郷アヴァロン

六枚目

魔眼……A +

ラスト

知識：B

となつた。

「次は僕だね」

そう璃音は言いつとダーツをなげる。

一投目

転輪する勝利の剣エクスカリバー・ガラティーン

二投目

対魔力：B

三投目

魔力：S

四投目

織天覆う七つの円環ロー・アイアス

五投目

破戒すべき全ての符 ルル・ブレイカ

六枚目

花散る天幕 ロザ・イクトウス

ラスト

知識：B

「これで終わりね。」

ヴェルさんはあたし達に近寄つて言つので頷くと

「それじゃ、良い魔生をおくつてね？」

「え？」

「少々コリと笑つて、ヴェルさんが言つた後、あたし達に意識は途絶えた。

「ふう……これでいいの？」

「ああ、少しだけでもしないと転生しないだらしね」

姉弟が消えた後に、ヴェルだ言つと一人の男性が現れて言つた。
どこか姉弟と似ているような雰囲気をまとった感じがする。
服装はスーツとマントをはおつた感じだ、

「神聖もいれたのか」

「こまじあんな子はいないからちょっとしたサービスよ」

ステータスを見た男性が言つと、ヴェルは笑顔で言つ。

ある程度いじられた状態で誕生する姉弟を哀れに思つ男性だった。

「さて、他の人を見に行かないとな」

そう言つと、ヴェルは去り、男性は水晶に触れてから白い空間から去る。

プロローグ（後書き）

ダーツとカードをしようしましたーー！

第1話 姉弟誕生（前書き）

転生といつたら赤ん坊からのスタートかなと思つて書きました

第1話 姉弟誕生

ここは、それぞれの魔族と人が住む隠れ里。

名はサイラスという地名にあるファンダリアという地域だ。子供は主に魔族と人のハーフとなつていて、そんな里にある大きな屋敷のことでした。

屋敷の中ではメイドや執事が忙しそうに行き来している。

そんな中を少年と少女が慌ただしく両親の居る部屋を目指していた。少年と少女は濃い金色の髪に碧眼で渝つて端正な顔立ちをしているのがわかつた。

少年は十歳前後で少女は九歳前後だろう。

「「お父様、お母様！生まれたつて本当ですか！？」」

バンッ！

といつ音とともに一人が扉を開けて入ると

「シスカ、アクア。そんなに慌てなくても逃げたりはしないよ

少年が成長した姿のような男性が苦笑いしながら言う。

「そうよ、可愛い子が生まれたんだから落ち着かないとな

「「……はい」」

少年と少女の母親は笑顔で窘めて言った。

それに少し落ち込みながら返事をする一人。

母親の髪は金色の髪で青色の眼をしており、とても綺麗だ。

「クスッ……おいで？」

その母親の声を聞いて二人はベビーベッドを覗き込む。
そこにはすやすやと眠る双子の赤ん坊の姿。

生まれたばかりだというのに肌はうつすらとピンク色がかつた白磁
で、ふわふわとした髪はこの世界でも珍しい銀色だった。
頭の上には三角の狐の耳があり、尻には小さいくて短い狐の尻尾が
あつた。

毛並みもよくて耳と尻尾の色は銀色らしかつた。

「お父様、この子達はお父様似のですね」

「そうだね、この耳と尻尾が証拠だらう」

兄、シスカールは赤ん坊を見て父親の「ティンに言つてティンは目を
細めて答えた。

そう、父親は魔族で極めて少ない妖狐族の者なのだ。

「でも、ちょうどよかつたわ。あなたはシスカとアクアがわたし似
で、すこしいじけでましたし」

「ショリル、それは言わない約束だらう？」

シスカとアクアの母親のシェリルはクスクスと笑つて言つてティン
は慌てながら近寄つて言つた。

それには呆れもするけどほほえましく思つシスカとアクアは見ていた。

「あれ、でも…この魔力」

「Jの子達には困難なことが待ち受けているかもしないけど、やつ
ていきましょうね?」

シスカの妹のアクアは赤ん坊を見て気付くと母親のシェリルが困つ
たように笑つて言った。

「もちろん!」

「わたし達の大切な妹と弟ですもの!」

シスカとアクアはシェリルにはつきりと告げる。
生まれる前からずっとそう考えていたからそう言えたのかも知れな
い。

その様子を見ていた父親のティンは赤ん坊を優しくなでてから安堵
したように微笑んだ。

* * * * *

「「おぎやあおぎやあ!」」

産声をあげてあたし達は意識が覚醒した。

どうやら無事に転生したようだ。と感慨深く思つてると
突然扉が開いて

「「お父様、お母様!生まれたつて本当ですか!?」」

少年と少女が息をきらして入ってきたのだ。

これには驚いたよ。

んで、話を聞くとどうやら魔族の妖狐族という種と人間のハーフらしい。

それも双子で生まれたということは極めてまれで珍しいということだ。

魔力も豊富にあるようで将来を心配されるようなことがあるみたいだ。

でも、家族みんなで守ると宣言してくれた。

それが凄くうれしかった。

ヴェルさんに入して転生させてはくれなかつたけど、こんな素敵な家族に生まれて嬉しいので恨まなことにしてみよつ。

そう思いながらあたし達は意識を眠らせる。

第1話 姉弟誕生（後書き）

感想と評価を楽しみにしておつます！！

第2話 誕生会！

ファイル side

「きょうはさわがしいね～」

「ほくたちのたんじょうびだからじゃない？」

今日はすこく騒がしい。

いつたい何があるというのだらうかと思つて言ひと弟のアレクが狐の尻尾を揺らして言ひ。

「ショッカーだから、さわがちいんだね」

「しょれしかかんがえられないとももつんだけど」

尻尾を立ててあたしが言つとアレクは呆れながら言ひ。
この世界に来てから性格が変わってきたのはなんでだらう。

「ファイル様、アレク様、そろそろ行きましょう？」

「「はあい」」

執事のルーレイに連れて行つてもらうと会場は凄い人数になつた。
ここまで人数が多いなると料理とか大変だつたらうな～。

「ファイルミシア、アレクトル、誕生日おめでと～」

「ファイルちゃん、アレクちゃん、誕生日おめでとう」

「「ファイル、アレク、3歳の誕生日おめでとう」」

上からお父様、次にお母様でその次がお兄様とお姉さまが祝つてくれました。

こんなに盛大な誕生日パーティーをひらいてもらえたなんて嬉しいな。

「「ありがとうございます、おとつせま、おかあさま、じいさま、ねえしゃま！」」

あたしとアレクは満面の笑みでお礼を言つた。
礼は大切にしないとダメだからね！

ファイル end

アレク side

どうも、アレクです。

双子の姉のファイルはケーキに夢中のようだ僕は暇なのです。
ここら辺を探索してもいいかな？

でも、迷子になつて両親や兄や姉に心配かけるわけにもいかないし。

どうしたもんかな。

迷惑をかけずに各、迷子にもならないような方法がないもんどうつか。

「アレク、食べないのか？」

考え事していたらシスカ兄が話しかけてきた。
フィルは食べてるのに僕だけ食べないのが心配なのかな。

「ぼく、いまはいらないから」

「そりゃ、なら……散歩でも行くか？」

僕は申し訳ない気持ちになりながら言うとシスカ兄が僕の頭を優しくなでてくれながら嬉しい提案をしてくれた。
なんだか嬉しくて尻尾と耳がぴんと立つた。

「うん、いく！」

「なら、決まりだな。」

僕が笑顔で言うとシスカ兄は僕と手を繋いで歩き出した。
はぐれないよう気をまわした結果なので僕も離れないように頑張つて歩いた。

すると苦笑いしてシスカ兄は歩くスピードを落してくれた。
優しい兄様に僕は感謝しながら会場を思う存分に散策した。
その際に竜人族とあつたり、魔族の猫族とも出会つたりもした。
ヴァンパイアにも出会つたて、充実した気分だ！

こういう日もたまにはありかな

第2話 誕生会！（後書き）

次回も頑張ります！！

第3話 魔族の双子の兄妹と幼馴染になる！

あたし達がちょうど6歳になつた頃に幼馴染となる双子の兄妹と出会つたのでした。

同じ年なのにどこか親近感がよぎつたのはあたし達だけかも知れない。

「ファイル、アレク。こっちに来なさい」

「はあー！」

あたし達はお母様に呼ばれて近寄ると同じ年くらいの少年と少女が立つていた。

男子の方は金髪のショートカットで、紫色の瞳・服は白い貴族服を動きやすくした様なデザインだ。

女子の方は、赤毛のボニー・テール・瞳は紫色・服は白いマントにインナースーツ姿となっていた。

誰だろうと思つていると

「こちらの二人はファイル達の幼馴染よ」

そう笑顔で言われたのでまじまじと相手を見つめてしまった。

気分悪くないかなと思つていると相手も田をまんまるにしてあたし達を見ていた。

注目してるのは狐の耳と尻尾みたいだった。

そんなに見られると恥ずかしいかも。

「お母さん、少し用事があるから席をはずすけど。仲良くするのよ

？」

そう言つとお母さんは笑顔で居間から出て行つた。
後に残つたのはあたし達と双子の兄妹だけ。

「あ、あの…初めてまして！あたし、ファイルミシアといいます。みんなからはファイルと呼ばれています」

「僕はアストリア。えつと…よろしく、ファイル」

緊張しながらあたしが言つと相手も緊張しながら皿口紹介をしてくれた。

うう、相手にも緊張させたらダメじゃんと落ち込んでいるとなんでもか相手は微笑んでいた。

なにかおかしなことしたかな？

気になるけど、今はいいや！相手を愛称で呼んでいいか聞かないとね。

「ねえ、アストリアじゃ長いから、アストって呼んでいい？」

「いいよ。でも、そんなに長いかな」

あたしが尻尾を揺らして聞くと頬笑みながら許可をもらつた。

アストは自分の名前が長いとは思つてないみたい。

十分長いと思つけどな。

* * * * *

アレク side

ファイルが自己紹介してゐる隣で僕も自己紹介することにした。

やつぱり兄妹だからかよく似てるなーと思いながら相手を見て

「僕はアレクトルというんだ。愛称はアレクだよ。えっと……君は？」

「アタシはサテラよ。よろしくね、アレク」

僕は笑顔で言うとサテラも笑顔で自己紹介してくれた。
笑顔が可愛いなーと思ったのは内緒。
じゃないとファイルにからかわれるしね！」

「サテラ達の種族つてなに？」

「アタシ達のは魔族だよ」

僕が小首を傾げて尻尾を揺らして聞くと笑顔で返事が来る。
普通の魔族としての魔力が強いということか。

この世界はグロウシュという光があふれている世界だから、人も魔族も獣人もドラゴンも有翼人や魔獣も魔法が使える。
中には既日食に生まれた人間の魔法の力は強いと言われてる。
妖精の加護にあふれている人間も使えるらしい。

中には妖力を使う魔族もいるとか。

ま、僕らは妖力と魔力の両方を使える存在らしいけどね。

「そつか、仲良くしようね」

「もちろん！」

僕は笑顔で言うとサテラは笑顔で頷いてくれた。

これからはどんなときにも一緒に遊んでいけたらなと思つ。
嫌悪する奴らがでても僕らは仲良くしていきたい。

それが僕とファイルの共通の考え方だから。

あと、予断だけど。この後一緒に屋敷内を散策したよ。

途中でサテラの両親に会つてあいさつもした。

驚いたことにサテラ達の両親つて成長したサテラ達みたいだつたんだよね。

シスカ兄達とも会つてサテラ達を紹介したら仲良くしてやつてくれつて逆に頼まれた。

なんか、複雑だよ。

第3話 魔族の双子の兄妹と幼馴染になるー（後書き）

感想と評価をお待ちしております！！！

第4話 猫娘姉妹登場する！

ファイル side

「暇だね～」

「何かすることないもんね」

ふもとにある湖で寝転んでいると

「ファイルにアレク！ みつけた！」

「サテラ、 眠つてたらどうするんだよ」

親友であり幼なじみの魔族の兄妹がこちらに向かって全力疾走して
きていた。

どうしたんだろ？と思つていると

「ここの二人、 知り合い？」

「魔族の中でも貴重な猫又族みたいなんだけど

サテラは小首をかしげて背負つてきていた二人の少女を下ろすと聞
いてきた。

うん、 どこにそんな力があつたのかツツコミたいけど、 ここはスル
ーしといつ。

「どれどれ？」

「あ、レナスとレイナスじゃないか」

サテラが下したのでその少女に近寄ると見覚えのある容姿が見えた。アレクが驚きながら呟いた。

そう彼女達は突如としてから引つ越してしまった子達なのだ。

よく見るとリリィの怪我をしてるのよつて見えた。治療の魔法を使つて一人の傷を癒すと

「うう…うは」

「田が覚めた? レナスちゃん」

ゆづくつと田を開けて直つてレナスちゃんに笑顔で聞くと

「ファイル! ? じゃあ、リリィは隠れ里なの?」

「そんなに驚く? ないよつな嘘がするけど。リリィは隠れ里だよ」

レナスが起き上がりつて直つて話るので苦笑つしてから答えてあげた。

「やつか、戻つてられたんだ」

「へ、よくわからぬにせど、おじさんとおばさんはじめましたの?」

どいか安心したようにいつひので小首を傾げて聞くと

「えつと…」

「言えなこのなら別にいいけどね」

困った表情をしたので笑顔で言い、これ以上の詮索はしないよう困った。

「ファイル、この二人は」

「あ、紹介を忘れてたね。幼いころに出会ったんだけど、突然引っ越ししたやつた姉妹で。

名前は」

アストリアが不思議そうにして近寄つて聞くので紹介しようとする

「わたしはレナスで、こっちは妹のレイナス。貴方は？」

「僕はアストリアと言つんだ。こっちは妹のサテラ」

レナスが立ちあがつて自己紹介するとアストリアに尋ねる。
アストリアは笑顔で言い、妹のサテラちゃんを紹介する。

「自己紹介もすんだことだし。湖で遊ばない？」

「それいいね！」

わたしが言つとレナスが満面の笑顔で言つた。
「こっちはアレクがこけたのは氣のせい」とこつこつおいつ

「まずは疲れてる一人を休ませる」ことが先決だろ……？」

「えーーつまんないよ」

アレクがわたしに言うのでもくれながらわたしは言った。
レナスは苦笑いしながらレイナスを背負う。

「遊ぶのはいつもでもできるよ。だから、屋敷に戻ろう?」

「アストが言うなら仕方ないかな」

アストリアが言うので仕方なくわたしは頷いて空間移動の魔法を使って屋敷に戻る。

内緒で出てきたから兄さまと姉さまに怒られたけどね。
あ、レナスはお父様とお話があるから書斎に向かつたけどね。

レナス side

「やうか。ここまでくれば安全だ、ゆっくりと休むといい」

「ありがとうございます」

フィル達のおじさまはとっても優しいからわたし達姉妹の事情もいち早く理解してくれる。

「それから、部屋は密間を使つといい」

「いいんですか?」

おじさまは笑顔で言うのを驚きながら申し訳なをうに聞くと

「いいんだよ。フィル達も嬉しいだろうしね」

「ありがとうございます……」の「恩一生忘れません」

笑顔で言うのでお辞儀をして感謝する。

この恩は絶対返そうと思つ。

だって、フィル達の大切な両親だから。

「では、失礼します」

お辞儀して出て行くとフィルとサテラちゃんが待ちかまえていた。
どうかしたのかな？

「一緒に部屋で寝よう？」

「パジャマパーティーを開催だよ……」

とフィルが笑顔で言うのでサテラは「」にこと笑つて言った。
この「一人はある意味似てるのかもしねないな」。

そんなことを思いながらわたしは一人と一緒に歩き出した。
平和な日常をもつと満喫する為に。
それからもつと強くなる為に。

ファイル side

目が覚めたら、街が燃えていた。
どうしてこうなったかはわからない。
呆然としていると扉が開かれた。

「ファイルミシア、逃げるぞ」

「良かった。無事で」

お父様とお母様がアタシを見て安堵したように笑つてからまっすぐ見つめて言った。

「お父様、お母様。どうして」

「理由はここから逃げてからだ」

アタシが困惑したまま言いづと有無をいわさずにアタシを抱き上げて部屋から出る。

お母様がアタシの部屋からリュックを取り出して部屋の物をいれると背負つて後を追つてくる。

「アレクー」

「お父様、お母様」

次の部屋に入るとアレクも呆然としたようにお父様を見た。
部屋にはシス姉達が居てアレクの持ち物をリュックにつめこんでいた。

どうしてここまでするのかわからないけど。

今の状況から分かる」とは

この街が襲撃されたということだけだ。
どうして、こんなことをするんだろう。悲しくて悔しくて涙が止まらない。

「…ファイル

辛そうに兄様が近寄つてきてアタシの頭を撫でてくれた。
兄様も辛いはずなのに。

途中でレナス達と合流して家の外に出ると、街がメラメラと燃えていた。

恐ろしくてお父様の服を握つていると

「「「ファイルちゃん、アレクー！」」

「アストにサテラちゃん」

急いで来てくれたのか少し服がボロボロだった。
傍にご両親が居て、今の事態を知つて子供達と逃げてきたのだろう。
荷物を持っている時点でそう思わないといけない。

「……」は危険だ、早く避難しよう

「ああ、ひとつあります……一番近い街に向かうとしおり」

そうアストリアのおじさんが言うのでお父様も頷いて走り出した。

アラス達は一々相手が出来ない相手にカリを飛ばしてい

「おっと、そう簡単には逃がさないぜ？」

「うるさい」

街はずれに向かおうとしてると人影が出てきて行く道を塞いだ。

「先に行け」

「お父様！」

そう言うとお父様がアタシを下ろした。
暖かくて優しいぬくもりが離れていく…嫌だ。
離れたくない

「嫌つ！お父様の一緒じゃないと！」

「ファイル…それでも…」こでは誰かが残らないとダメなんだよ?」

アタシがお父様の服を握つて言つとお父様はしゃがんで目線を合わ

せて、言ひついで頭を優しく撫でてくれた。

「行くぞ」

「待つてーーお兄様ーーまだ、お父様がつーー」

お兄様にお父様が目で合図するとアタシを抱き上げて走り出した。お父様の傍にはアストリアのおじさんも一緒にいた。

「ちひ、逃がすかよひ

「おひと、お前の相手は我々だ」

人影が動くつとするとお父様が行く手をせきつて言つた声が聞こえた。

しばらくして燃え盛る街を抜けると、ここからでも燃えている街が見えた。

途中で追手も来たのでお兄様とお姉さまが残つて追手を引き留めてくれた。

安全な場所に来るとお母様とアストリアのおばさまがいなかつた。途中ではぐれてしまったのだろうか。

第5話 街、襲撃（後書き）

街が何者かによって襲撃。

いつたい誰なんでしょう？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0239w/>

魔族（妖狐）族に転生しました

2011年10月6日20時39分発行